

私を受け容れて生きる・父と母の娘・末盛千枝子著

私を受け容れて生きるは末盛千枝子さんが、半生を振り返って記した「心の旅」の記録です。千枝子さんは彫刻家として有名な船越保武と、俳人として将来を期待されていた詩的スピリットと好奇心に富む道子の長女として1940年に生まれ、4歳から10歳までは父保武の故郷盛岡で過ごしましたが、それ以後は東京在住、絵本作家として有名です。2010年からは夫とスポーツの事故で首から下が不随になった長男と共に父の郷里岩手県に移住、現在も長男と共に岩手県八幡平市に住み、著作活動などにいそしんでいます。千枝子という名前は父船越保武が詩人で彫刻家の高村光太郎に命名を頼んだ時に「女の名前は智恵子しか思い浮かばないけれど、智恵子のような悲しい人生になってはいけないので、字だけは変え替えましょうね」と言って千枝子と名付けてくださったのだ、と小さい時から繰り返し聞かされて来たと言っています。慶応大学文学部卒業後、至光社という絵本の出版社では働いていた頃から途中で中断はありましたが、生涯絵本とか関わりのある仕事を続け「大切な物は皆絵本が教えてくれた」という著書があります。又井沢洋二氏のシャープな切り絵と千枝子さんの妹・船越カンナの文章により制作された絵本はボローニャのブックフェアでグランプリを獲得しました。

又上皇后美智子様のご講演「橋をかける」と「バーゼルより」アンデルセン大賞の荣誉に輝いたまどみちおの詩集「どうぶつたち」(美智子上皇后翻訳)は末盛千枝子さんが経営するすえもりブックスから出版されました。美智子皇后について末盛さんは以下のように述べています。「最後に日本ではほとんど知られていないと思うが、ドイツ・ミュンヘンにある世界最初の国際児童図書館には過去に児童文学にかかわった三名の大切な人の名前が名誉会員として掲げられている。ケストナー、リンドグレーン、そして三人目があの「橋を架ける」のご講演で愛と犠牲が分かちがたくあることを、私たちは何よりも人生の複雑さに耐えて生きていかなければならないことを優しく人々に語られた日本の上皇后美智子様であることをお伝えしたい。」

若い頃の恋人の死、長男の難病、この上なく優しかった夫・末盛憲彦氏の急逝、長男が事故により首から下が不随になるなど数多くの耐えがたい苦難に遭遇しますが、いつも絶望に留まることなく立ち上がり次のステップに進みます。少女時代に読んだ若草物語の四姉妹のお母さんが「どんなに悲しいことがあっても朝になったらお日様に悲しい顔を向けてはいけませんよ」と述べている言葉が心に残っていますが、キリスト教のバックボーンのあるこのお母さんのことばとカトリックの千枝子さんの生き方には相通じるものがあるような気がします。末盛さんは「トラピスト大修道院の院長に苦しい胸の内を訴えたことがあった時「どんなに大変でもそれに見あったお恵みは必ず与えられるのだから絶望することのないように」という返事を頂いた。厳しくも暖かい言葉でまさにそれこそが「幸不幸はあざなえる縄のごとし」ということなのかもしれない」と述べています。末盛千枝子さんのひまわりのような向日的な生き方に深い感銘を受けました。

